

# 四代のことばと<コ・ソ・ア>

高崎 みどり

## 1. はじめに

前号のS家録音資料についての「三代のことばと<コ・ソ・ア>」に引き続き、今回もN家四代のことばを<コ・ソ・ア>という角度から分析した結果を報告する。

<コ・ソ・ア>のような、一見世代差と何の関係もなさそうな言語現象でも、談話の流れの中で見るとやはりそれなりの個性的な使い方というものが見られる。指示語を分析するいくつかのポイントに関して、今回のデータを使い手別に整理して眺めてみると、確かに使い手の間に質および量において差が生じていることがわかってくる。それをすぐに年代による差異というふうに一般化はできないけれども、ここでこの年代の人がこのように使っている、ということくらいは言えると思う。

まして、単なる感想にせよ、以前は、女性は会話において「『それ』『あれ』などの指示語を多用する」と指摘する人もいた。<sup>(注1)</sup>あるいは、指示語と感動詞の関係を考えた場合、「あら！」や「あれえー(悲鳴)」や「あの一(場つなぎ)」等のア系は「女ことば」である、との指摘も意味深い。<sup>(注2)</sup>女性の会話資料の中から<コ・ソ・ア>に注目して考えてゆくことは意味のないことではないだろう。

ともかく整理した結果を以下に示そう。

## 2. <コ・ソ・ア>別の数量内訳

今回対象としたのは、インタビューの最初から、写真を見せるなどで話題の変わる1131Sの前、1130Hまでの1130発話である。その中から1189個の<コ・ソ・ア>を採集した。採集の基準は、原則として<コ・ソ・ア>の付く語であれば、接続詞でも慣用句的なものでもすべてとった。

内訳は次の表Iのとおりである。

| 系別     | コ 系 |    | ソ(ホ)系    |     | ア 系    |     |
|--------|-----|----|----------|-----|--------|-----|
| 内<br>訳 | こう  | 72 | そう(ほう)   | 315 | あの     | 293 |
|        | この  | 49 | それ(ほれ)   | 170 | あれ     | 49  |
|        | こっち | 21 | その       | 93  | ああ     | 8   |
|        | これ  | 17 | そんな(ほんな) | 30  | あそこ    | 6   |
|        | ここ  | 14 | そこ       | 21  | あっち    | 3   |
|        | こんな | 6  | そうそう ㊤   | 16  | あっちこっち | 1   |
|        | こちら | 3  | そっち      | 1   |        |     |
|        |     |    | それぞれ     | 1   |        |     |
| 合計     | 182 |    | 647      |     | 360    |     |

表 I

表の㊤・「そうそう」には、「そうそうそう」や「そうそうそうそう」も入る。

ソ系の多さが際立ち、中でも「そう」の多さが目立つ。

### 3. 自己文脈か他者文脈か

これは、単純に<コ・ソ・ア>の受けていると判断される内容が、話者自らの発言か、それとも話者以外の他者の発言かで分けたもの。従って、全く指示対象がないと思われる例(後述)については、この分析から除外してある。

たとえば

- 007S01 あの 中学生と 小学生の 子供が おります／  
02 で あの一 じつは 山梨県の うまれなんです／  
008N01 ああ そうなんですか?／

この「そう」は、直前のSの発言内容を受けているので他者文脈とし、また、

- 172Y02 センズワっちゅうとこにね あの 望月ヨエモンちゅう 人でね  
あの 昔は 弁護士を した 人でね えらい お父さんだった  
の／
- 03 で 九十六まで いったの／
- 04 九十六ぐらいまで いったねえ そう いう おじいさんがね  
い・いるですよ ええ／

の「そう」は、同一発話内の自分の発言内容を受けているので、自己文脈となる。

また、自己+他者文脈というもの僅かだが存在する。たとえば、

- 700N01 まる 五年 たった／
- 701U01 まる 五年 そう うん 二月で／

の「そう」は、Nの発言した内容と、U自身がそれを繰り返した「まる五年」との両方を受けているものと考えられる。このようなものを自己+他者文脈とする。

そして、その各々に「とび」というバリエーションがある。つまり、「とび自己文脈」だと、

- 217Y04 あの こんだ きた 嫁がね キヨミっちゅうんですよ／
- 218S01 はい
- 219N01 ああ そうか ちかくだからねえ／
- 220Y01 そいで キヨミちゃんが いうんだけどねえ／

の「そい(それ)」は、218Sと219Nの2個の発話が間に挟まりながらも、受けているのはそれらを飛ばしたその前の自分の発話、217Y04の内容である。このような使われ方を、間に他人の発話が入ってそれらを飛びこして受けているということで「とび自己文脈」とする。

同様に「とび他者文脈」は次のような例。

- 451Y01 (略) だって その時分 あたしと 同い年の 人 字を かけ

ない 人 いっぱい いますね／

02

｝ (略)

08

452S01 (略)

453Y01

｝ (略)

04

454S01 晶子さんなんかがおきになると もう 別世界の 話みたい  
いじゃ ないですか／

455N01 なんか 歴史の 授業みたいな かんじ(\*)／

456S01 字がねえ よめない 人が そんなに いたとかねえ／

このように、かなり飛んでいて、間にいくつかの発話や<コ・ソ・ア>が入っていても受けることができている。

同じく「とび自己+他者文脈」は次のような例。

790N01 半々ぐらいだったんでしょ | 最初は／

791U01 うーん そうですね／

792S01 じゃ もう その うま・生まれた ときからっていうと あれ  
かしら 言葉を 覚えて この かつ そう・そう いう こと  
は ほとんど 意識 しなくても ずっと自然に(略)

これは、ここまでずっと自分たちがすごしてきた地域や場所でのことばづかいについての話題が続き、Sも質問や確認を挟むことによってそれに参加していた、という文脈がある上での「そう」なのである。

さて、以上のような区別をした上で、話者別に整理してみると、次の表Ⅱのようになった。

|            | Y    | H    | U    | A    | N    | S    | 合計   |
|------------|------|------|------|------|------|------|------|
| ①自己文脈      | 90   | 50   | 9    | 13   | 11   | 26   |      |
| ②とび自己文脈    | 42   | 9    | 5    | 1    | 4    | 4    |      |
| ① + ②      | 132  | 59   | 14   | 14   | 15   | 30   | 264  |
| % ㊦        | 82.0 | 58.4 | 21.9 | 50.0 | 32.6 | 22.4 | 49.4 |
| ③他者文脈      | 22   | 39   | 45   | 12   | 27   | 82   |      |
| ④とび他者文脈    | 1    | 1    | 4    | 0    | 3    | 14   |      |
| ③ + ④      | 22   | 40   | 49   | 12   | 30   | 96   | 250  |
| %          | 14.3 | 39.6 | 76.6 | 42.9 | 65.2 | 71.6 | 46.8 |
| ⑤自己+他者文脈   | 6    | 1    | 1    | 1    | 0    | 4    |      |
| ⑥とび自己+他者文脈 | 0    | 1    | 0    | 1    | 1    | 4    |      |
| ⑤ + ⑥      | 6    | 2    | 1    | 2    | 1    | 8    | 20   |
| %          | 3.7  | 2.0  | 1.6  | 7.1  | 2.2  | 6.0  | 3.7  |
| ⑦ 合 計      | 161  | 101  | 64   | 28   | 46   | 134  | 534  |

表 II

表の注 「%」は各人の合計(⑦)を100として、各用法がそれに占める割合を算出したもの。

この表から見てとれることをまとめてみる。

まず、高年令層に属するYとHは、自己文脈で使用する場合が多く、逆に中年層のUと中年男性のN、司会の中年女性Sはともに他者文脈で使う割合が多いといえる。

特にYは文脈を受ける用法で使用する場合の8割以上が自己文脈を受ける用法である。中年層のUは、逆に8割以上が他者文脈での使用であって、対照的である。一方、若年層のAは使用用例数自体が少ないこともあってははっきりしたことは言えないが、自己文脈の方がやや多くなっている。

すなわち、高年令層のYは、自分の発話内容を先行部として指示語で受けついでゆくことが多い。加えて、「とび自己文脈」の用法が他と比較して多いことから、間に他人の発話が入っていようと、その前の自己の発話内容

に戻って受けつぎ、話を展開させてゆく方法をとることも多いことがわかる。

これについてももう少し推論を加えると、他の人とのやりとりで話の方向が決まってゆく会話ではなく、自分で話したい内容、話したい述べ方というものがある、それに従って展開させてゆく会話をYは志向しているのではないかと考えられる。

逆に中年層、特にUは、やりとりに沿うことで会話に参加しているような立場なのではないかと推察される。また、司会のSは、中年層というより司会の役割上、相手の発話内容をいちいち受けながら、会話を進行させてゆくものと思われる。

もちろんこうした働きは、他の言語現象によっても支えられてはいようが、〈コ・ソ・ア〉のうちの、特にソ系の語もその一端を担っていると考えてよいだろう。

#### 4. 機能別分類における様相

〈コ・ソ・ア〉の用例全体を、今回の談話中の使われ方によって、

- I. 指示機能あり、と認められるもの
- II. 指示機能はあるが希薄なもの（注3）
- III. 指示機能がないもの

の3種に大きく分けた。

さらにはじめの「I. 指示機能あり、と認められるもの」を、「a. 現場指示」と「b. 非現場指示」とに分けた。ここでいう現場指示は、談話中の場面に物として存るものを指示する場合の用法。非現場指示は、相手や自分の言った発言内容を指示するもので「文脈指示」と言われることもある。この非現場指示をさらに、指示する範囲が割合狭く限定されたものである場合（＝①限定）と、割合広くて限定しにくい場合（＝②非限定）との2つに分けた。

たとえば「I b ①限定」は、

360H01 鶴見区なんですけどね エガサキってところある／  
02 そこに あの ちっちゃい まあ うちが 工務店 やってます

んで (略)

の「そこ」のような場合で、これは~~~~線の場所を示す地名を指示している。このような割合ははっきりと<コ・ソ・ア>の受ける語句や内容が限定される場合の用法である。

これに対して「I b②非限定」は、

431Y01 17年間ね そう いう 商売 してたですよ ええ／

の「そう」のような場合である。この発話より前の、450H01および406Y01から427Y01まで、Yのやった仕事が話題にされており、それらすべてを受けて「そう」と言っている。かなり広範囲で情報量も多く、このような場合、狭い範囲の語句や内容に限定できないので、「非限定」とするのである。

次の「II. 指示機能はあるが希薄なもの」について、この中をさらに「II A. あいづち表現」「II B. 答の表現」「II C. つなぎ表現」「II D. その他」に分けた。

「II A. あいづち表現は」、

437Y01 水晶の はんこだとか 帯留めだとか いろんな ものをね もちあるいて よく うれました／

438S01 ああ そうですか／

のように、相手の言ったことに了解の意や賛成・同意を示したり、共感を示したりする表現に<コ・ソ・ア>が使われる場合である。

「II B. 答の表現」は、

717S01 中学生 え と 晶子さんが 中学生の ところから／

718U01 そうですね／

の「そう」のように、何か質問されて、それに対し肯定または否定の情報を与えるときに使われる表現に<コ・ソ・ア>が出てくる場合である。

「II C. つなぎの表現」は、

862A01 電話で 言われるのは 電話で 最初 その うちの お母さん  
が できる じゃ ないですか／

02 そいで お母さんとの 話しかたが やっぱ ふだん 自分より  
目上の 人と しゃべらないから 友達に しゃべるように う  
まく いえないんですよ | 敬語なんかが／

の「そい(それ)」のような例。前後のつながりをもたせるのに<コ・ソ・ア>が使われている場合で、いわゆる「接続詞」とされるものが入る。「ⅡD」はこれら以外のもの。「このごろ」「そのうち」「その時々で」「この前」などの言い方に含まれる<コ・ソ・ア>の使い方が入る。

このⅡに入れたものは、<コ・ソ・ア>に指示機能があったとしても希薄であり、むしろ<コ・ソ・ア>を含む語句全体が、何らかの副次的機能 — あいづち・つながり…etc — を持っていて、その機能の方が比重が高いと判断されたものである

最後に「Ⅲ. 指示機能がないもの」は、いろいろなものが入っているが、特に下位分類はしないことにする。この中には、

001S01 じゃあ あの はじめさせて ください／

のように空白補充の働きのみで、何も具体的には指示するものがない場合や

912H01 でも よく 電話 あたし 娘のどこ 電話かけてますよね／  
そうすとね ひでちゃん だれと 電話 かけてたの つうから  
いや 由比子よ 由比子とよつったら 自分の 娘に そんな  
言葉 つかうのって／

のように、他の人のことばを引用する中で使われており、現実の文脈では何もさすものがない場合。あるいは、

995Y01 (略) 言葉はね あの 気を 気をつけて 使わないと 向こう  
の 相手の あの あれ 傷つける ことが あるから そりゃ  
大事 なんですよ／



の「そりゃ（それは）」のように、強調のために使われている場合などである。

以上のように考えて用例を分類し、話者別に整理したのが次頁の表Ⅲである。これを見ると、Ⅰ～Ⅲの各用法に、各話者の占める割合がわかる。

これを見ると、まず、最下段の各人別の発話割合に比して、Yはやや多く<コ・ソ・ア>を使っていると言えそうである。

また、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの用法別のところを見ると、Yが、Ⅰ．指示機能がある用法と、Ⅲ．指示機能がない用法で、発話割合に比しても多く出ており、また他の話者と比べてもその用法で最も多くの割合を占めている。Ⅱ．指示機能はあるが希薄な用法では、Yは、発話割合とほぼ同じ割合を占めているが、その中の「ⅡC．つなぎの表現」では他の話者に比して非常に多くなっているのが注目される。

すなわち、Yは、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ各機能において発話者の中で最も多く使う人であり、特にⅡCの「つなぎ」では全話者中の半分以上割合を占めている程、多く使う話者であると言える。Yはそもそも発話の割合自体が多いのだが、Ⅰ・Ⅲの機能とⅡCについては、その発話割合より上まわって使用している。<コ・ソ・ア>の使用自体も発話割合を上まわっている。ゆえにYは、<コ・ソ・ア>を質・量ともに活発に使う話者であると言ってよい。

Y以外の話者では、UがⅡA「あいづち」とⅡB「答」において多くを占めていること、司会SがやはりⅡA「あいづち」の多いことが注目される。これらはYが低い割合しか占めていないものである。

こうしたことを別の角度から見るために、同じデータを各人別の用法の割合を示すように組み替えて割合を出したのが次々頁の表Ⅳである。

この表を見ると、各話者別でどの用法が多くを占めているかがわかる。

中・高年令層のY・H・UおよびS（司会）は、いずれもⅢの「指示機能なし」の用法で<コ・ソ・ア>を最も多く使用している。つまり指示対象のない、指示語らしからぬ用法でよく使っているということになる。「全体」の割合もそうである。

|                          | Y           | H           | U           | A         | N         | S           |
|--------------------------|-------------|-------------|-------------|-----------|-----------|-------------|
| I a 現場指示                 | 33.9        | 29.4        | 10.1        | 11.0      | 4.6       | 11.0        |
| - I b 非現場指示              |             |             |             |           |           |             |
| ① 限定                     | 34.9 - 36.5 | 20.0 - 17.4 | 11.6 - 13.2 | 6.9 - 5.9 | 7.4 - 9.1 | 19.2 - 17.8 |
| ② 非限定                    | 32.1        | 14.1        | 9.0         | 3.8       | 6.4       | 34.6        |
| II A あいつち                | 10.1        | 18.8        | 21.5        | 4.0       | 12.8      | 32.9        |
| - II B 答                 | 10.7        | 25.0        | 35.7        | 17.9      | 0         | 10.7        |
| - II C つなぎ               | 27.3        | 21.2        | 15.1        | 6.1       | 8.0       | 22.2        |
| - II D 他                 | 55.2        | 24.1        | 0.9         | 3.4       | 4.3       | 12.1        |
|                          | 16.7        | 16.7        | 22.2        | 22.2      | 5.6       | 16.7        |
| III                      | 37.9        | 26.1        | 10.4        | 2.1       | 3.6       | 19.9        |
| 全部の( )・7)の中<br>で各人の占める割合 | 34.1        | 22.7        | 12.0        | 4.8       | 6.1       | 20.3        |
| 発話行数でみた各人の<br>発話割合       | 27.1        | 23.7        | 13.1        | 8.0       | 8.4       | 19.7        |

表 III

表の注 ・数字はすべて%を示す。

- ・ I・II・IIIの右の欄の数字は、I・II・IIIの各用法の用例数を各々100とした場合、それぞれの用法に各人の占める割合を示す。
- ・ 「発話行数でみた各人の発話割合」は、録音資料の文字おこし資料の表示行数を基にして算出したもの。

今回対象とした001～1130までの全行数 2,309行を100とした。

|             | Y           | H           | U           | A           | N           | S           | 全体   |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|------|
| I a 現場指示    | ( 9.1       | (11.9       | ( 7.7       | (21.1       | ( 6.9       | ( 5.0       | 34.1 |
| - I b 非現場指示 | (35.0 -19.7 | (30.0 -14.1 | (32.9 -20.3 | (49.1 -22.8 | (41.7 -27.8 | (32.4 -16.2 |      |
| ① 限定        | ( 6.2       | ( 4.1       | ( 4.9       | ( 5.3       | ( 6.9       | (11.2       | 27.4 |
| ② 非限定       | 25.9        | 18.1        | 25.2        | 28.1        | 34.7        | 27.4        |      |
| II A あいづち   | ( 3.7       | (10.4       | (22.4       | (10.5       | (26.4       | (20.3       | 26.2 |
| - II B 答    | ( 0.7       | ( 2.6       | ( 7.0       | ( 8.8       | ( 0         | ( 1.2       |      |
| - II C つなぎ  | (20.9 +15.8 | (24.4 -10.4 | (32.9 - 0.7 | (33.3 - 7.0 | (34.7 - 6.9 | (28.6 - 5.8 |      |
| ( II D 他    | ( 0.7       | ( 1.1       | ( 2.8       | ( 7.0       | ( 1.4       | ( 1.2       |      |
| III         | 44.1        | 45.6        | 34.3        | 17.5        | 23.6        | 39.0        | 39.7 |

表 IV

表の注 ・ 数字はすべて%を示す。

・ 数字は、各人の使用した<コ・ソ・ア>の合計数を各々100とし、その中にそれぞれの用法の占める割合を示す。

・ 右端の「全体」は、6人の話者の<コ・ソ・ア>すべての合計数を100とし、全体としてどの用法がどれくらいの割合を占めているかを示す。

さらに細かく見ると、中年のU・Sより、高年令層のY・Hの方が、Ⅲの割合は多い。

一方、若年のAと男性中年のNとは、ともにIの「指示機能があると認められる」用法で使うことが最も多い。すなわち、最も指示語らしい機能を発揮させて使用している。〈コ・ソ・ア〉を指示語としてまともに使っていると言えよう。

## 5. その他の観点から

ここでは、これまで述べてきたこと以外に録音資料を見て気づいたことをいくつかあげてみたい。

### 5-1 くずれ形

話しことばには、縮約・音便・訛などのくずれがつきものであるが、〈コ・ソ・ア〉に限ってみてみることも意味がないわけではないだろう。

487H02 細かい 仕事に すごく 器用で そいで あの あとの ほった あとの 仕上げが あるんですよ／

のように「ソレデ→そいで」のようなくずれが認められるものを集めてみた。「ソレデ→ほいで」のような、あるいは方言的な変異形かと思われるものも含めた。それをまとめて7個(①～⑦)のパターンに分け、例と、話者別の用例数を添えた表が次の表Vである。

これを見るとわかるように、高年層のYが非常に多く、くずれた形を使っている。Hがそれに次ぐ。UとSはゼロ。NとAが僅か、という結果であった。特に「ソ→ホ」となるくずれは、Yの用法がほとんどすべてであった。

### 5-2 話者本人だけにとどまる指示 — 「あれ」

たとえば、次のような用法である。

422Y02 そいで あの ええ あれは 郵便局の あの えーと 大きい  
ほら 局ね／

|     |                            |      |      |     |     |
|-----|----------------------------|------|------|-----|-----|
| ①   | ソレ→ソイのパターン<br>例：そいで・そいから   | Y 38 | H 14 | A 2 | N 3 |
| ②   | ソレハ→ソリャ (ソラ)<br>例：そりゃ・そりゃあ | Y 4  |      |     |     |
| ③   | ソウ→ソ<br>例：そしたらね            | Y 2  | H 1  | A 1 |     |
| ④   | ソノ→ソン<br>例：そんとき            | H 3  |      |     |     |
| ⑤   | ソ→ホ<br>例：ほいで・ほれが           | Y 11 | H 1  |     |     |
| ⑥   | コンナニ→コンネー                  | Y 1  |      |     |     |
| ⑦   | アレハ→アリャ<br>例：ありゃ・ありゃあ      | Y 2  |      |     |     |
| 合 計 |                            | Y 58 | H 19 | A 3 | N 3 |

表 V

あるいは、

439Y01 それからねえ この あの 鉄道ね 鉄道 あの 鶴見から あの えー カシ あ あ あそこの なんちゅう ところだっけ／

あるいは、

441Y05 あのゴム印だとか ほいから 水晶印だとか ほいから あの あれです あの ときはね ええ あれが はいって きまして ね あの アメ・アメリカ人が ほいからね あの こう ズボンだとか あの こう いう 着る もんだとか そう いうまで もちあるいてね よく うれました／

あるいは、

927Y02 だからね 言葉は 丁寧にね 使って あれ しなきゃあね なるか 一品 買って もらうにゃー やっぱり むこうを こう あや・あがめなけりゃ ね 買っていただけませんからね／

03 そいで 言葉もね ちゃんと そう いう ふう<sub>に</sub>ね あれ し  
て 使って おりました もんでね ええ／

あるいは、

1045Y01 いや あたしも こまったにはね あの あっちの あの あれ  
は なんだっけな あの えー 東北の かた あの 言葉がね  
ずーずー言葉でしてね それで あたしが シミズさんって い  
うのにね スミズさんって いうんですよ／

などといった例。

これらは、地名や語句が思い出せない、思い浮かばないので、とりあえずそれに「ア」を与えて構文の中に組みこんで言いたいことを概ね言っておく。後からその「ア」を与えたものに説明を加えて情報を補充するというやり方である。すなわち、比喩的にいえば、言いたいことをまず言うために、思い出せないものを $x$ として文を作り、発話してしまってから後で $x$ を満たす条件を添えるのである。このやり方は他にHに少しあるが、高年令層のYが最も多く用いる。

話者本人だけの指示機能にとどまり、聞き手にはよくわからないわけだが、その語を思いつくために話者が立ち止まってしまうよりは、とりあえず話を進行させてしまえるのでなかなか便利な用法とも言えるかもしれない。また、「ア」を与えた場合は、聞き手との共有知識に訴えかけているというサインもあるので、聞き手がその $x$ の値を決めるのに助力してくれるのをあてにもできる。

### 5-3 “語り”の口調

605H02 ええ そいでね あのねえ そう もう 昔っから ま 子供  
あのね お嫁に いく 前は おかあ・あの お母ちゃんつつつ  
てたんですよ／

(中略)

09 それから もう 今でも お父さんなんですよ／

- 10 ほいで あの お父さんも あの 自分の 娘達が おと・お父  
 さんも うん 八十 もう 八に なりますよね | そろそろね  
それ 十月ですから /
- 11 そいで それ あの きょうだいが あの もう 年を とって  
 もう お隠居さんに して 楽さして あげたいから あの 親  
 の ことを おじい・おじいちゃんって いおうよって こう  
 ゆった おむこさんが いたんですよ | わたしの きょうだい  
 でね /

上記のような発話で —— 線を施した<コ・ソ・ア>は、ほとんどがはっきりした指示機能を果しているわけではない。しかし、何も指さず、ムダなもの、としてこれらをもし取り去ってしまうと、意味は通じるが、ゆったりとした語りの口調は消えてしまい、何かのセリフのようでかえって不自然な感じになるものとなる。

すなわち、ⅡやⅢの用法のような、指示語らしからぬ機能を持つ<コ・ソ・ア>が、語りの口調を整え、また、聞き手の理解の追いつくのを待ちながら、話者自身もこれから言うべきことを思案する“間”として利用されるのではないか。こうした使い方は、やはりY・Hの高年令層に多いように思われる。

## 6. おわりに

今回の調査分析では、高年令層のうちの特にYが、<コ・ソ・ア>の使い方と質・量ともに際立っていた。

あることばを知っているということと、そのことばを“使いこなす”ということは大いにちがうことである。Yは、<コ・ソ・ア>を本来の機能以上に働かせているということが言えるように思う。すなわち<コ・ソ・ア>を“使いこなす”ということ、具体的な現実の談話の中に捉え、実感することができたように思われる。

- 注1 伊吹 一「とかく要領の得ない女性の会話」『青年』61号  
日本青年館 1971
- 注2 寿岳章子『レトリック — 日本人の表現 — 』126ページ  
共文社 1966
- 注3 前号S家の分析では「空白補充」の機能をⅡに入れていたが、今回はそれをⅢの方に分類して含めた点が異なっている。